

桜の実が熟するまで

辻 憲男 (文学部教授)

愛した佐藤輔子にはすでに許婚者 (いいなづけ) がいた。島崎藤村は失恋した。教師を辞め、教会を離れ、自我と向き合う旅に出た。神戸へ来たのは、恩義ある先輩から広瀬恒子を紹介されたからだった。四つ年上の恒子は、武道も修めた気骨のある才媛。神戸・中山手の幼稚園保育のミッションスクールで学んでいたが、実の姉のように、家や生活の世話をしてくれた。藤村はこの美しい人にも好意を持ってしまった。明治26年(1893)2月、藤村22歳、北村透谷ら文学仲間と交わり、人生いかに生きるべきかの苦悩のただなかにいた。

「彼女の話しかける言葉や動作は何がなしに捨吉の心を誘った。旧い日本の習慣にない青年男女の交際というものを教えたのも彼女だ。初めて女の手紙というものをくれたのも彼女だ。それらの温情、それらの親切は長いこと彼に続いてきた少年らしい頑固(かたくな)な無関心を撫で柔らげた」。少年の恋はサクラランボのようにあまずっぱい。後に書いた自伝小説『桜の実の熟する時』は、主人公捨吉が文学に志し、自由な恋愛に破れ、旅に出て将来に希望を見いだすまでを描く。作中の女性のモデルになったのが恒子と輔子である。

現実の藤村は恒子に近づきすぎて、先輩から強くたしなめられた。自責の念から、今後は彼女と文通することも断念した。生活費が底をついた。あげくは東北まで漂泊して、東京に帰ったのは同じ年の10月のことであった。



とうそん つねこ
藤村が恒子を訪ねてやって来た、神戸・山本通5丁目付近。